

第 50 回明治大学博物館公開講座「考古学ゼミナール」

『日本考古学の未来』

質問回答集

第1講 邪馬台国論争のゆくえ

大塚 初重先生（明治大学名誉教授）

【質問 1】 卑弥呼や邪馬台国について、なぜ「古事記」や「日本書紀」に記述がないのでしょうか。

【回答】712年、720年編さんの両書は、帝紀や旧辞を資料として編さんされたものであり、両書の性格は異なっています。しかし、2世紀から3世紀におよぶ倭の歴史的な状況と外交関連の事実をまとめた中国側の文献と、その内容が倭国側に反映されなかったことの真相は不明です。

「日本書紀」巻第九では、神功皇后39年に『魏志』を引用し「明帝景初3年6月、倭の女王が大夫難升米を遣わして貢献した」こと、翌40年には魏志は「正始元年、建忠校尉梯携等を倭国に派遣」したこと、43年には「正始4年、倭王が8人の使を遣わして上献す」と記しています。

この3条におよぶ『魏志』倭人伝の記事を引用したのは、神功皇后が卑弥呼と見たからと言われています。

古事記では全く記載されず、日本書紀では神功皇后紀にのみ記されていることは、書紀の編者が卑弥呼と神功皇后を同一人物視して卑弥呼の生存年代で、神功皇后の在位年代を定めたものと言われています。

当然、宮廷の書紀編さん者のもとには『魏志』があったものと思われる。それにも拘わらず、「倭人伝」の記載がほとんど古事記・日本書紀に反映されなかったことは、編さん者達の中国史料に対する理解が薄かったか、神がみが生み出す建国神話の世界を信じて、外国の史料に対する認識度がほとんど欠けていたのかもしれない。

【質問 2】 邪馬台国論争について、民族学など他分野からのアプローチがあるのでしょうか。参考文献などご紹介いただければ幸いです。

【回答】民族学など他分野の論文は多くはありませんが、三品氏の総覧を参照して下さい。

三品彰英「民族学から見た魏志倭人伝」石井良助・井上光貞編『シンポジウム邪馬台国』1966 創文社

江上波夫・岡正雄ら「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」民族学研究 13巻 3号 1949

中山太郎「魏志倭人伝の土俗学的考察」考古学雑誌 12巻 1922

宮本勢助「貫頭型衣服考」民族学研究 第2巻 1936

三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』創文社 1970
同書には、210 篇の論文が紹介されています。

【質問 3】倭人伝の邪馬台国問題で考古資料として鏡の問題が中心になっているようですが魏からの下賜品として、他に五尺の刀 2 口、銀印、鉛円等は余り取り上げられていません。これらの考古学的研究はどのような状況にあるのでしょうか。

【回答】魏からの下賜品として五尺刀については、近年、奈良東大寺山古墳の報告書の中で、金関恕氏らが、東大寺山古墳出土の素環頭大刀について、卑弥呼が受けた五尺刀ではないか、(とくに中平□□年銘とある刀)と示唆されています。若し、そうだとすると 239~240 A.D.頃に受けたとすると、4 世紀中頃の東大寺山古墳に副葬されるまでの歴史的過程をどのように考えるか課題は多くあります。

卑弥呼遣使の難升米たちが印綬を受けたと記してありますが、卑弥呼の「親魏倭王」の金印や次使の「銀印」があつてしかるべきでしょうが、出土しておりませんから問題として論ずることはできません。

多くの研究者は、貰ったことが確実だとなれば、必ず発見される日が来ることであろうと思っています。倭人伝にいう「五尺刀二口」は特定できませんので問題にできないのです。「中平□□年」銘の鉄刀が中国刀として確実なので、若しかすると、卑弥呼に与えられた刀か?と思われませんが、真実はわかりません。

【質問 4】箸墓古墳の実年代を 240~260 年とした国立歴史民俗博物館の放射性炭素年代測定法について、実年代への算定式や資料の量や質の問題点が指摘されていますが、どのようにお考えですか。

【回答】C¹⁴の年代測定も AMS の採用によって一段と細密化していることは事実です。但し年輪年代学の結果を較正年代として、とり込む折に暦年代をどう計算するかによって、古く見る立場と新しい年代と見る立場とに分かれるようで、誤差のプラスマイナスを 40 年、50 年と見ると、弥生後期から古墳出現期の細い年代差に狂いが生じてしまいます。

歴博発表年代の弥生早期(旧縄文後期)が B.C.900~1000 という年代は事実であったとしても唐突な発表で、中国・韓国でも異論があつたようです。多くの考古学研究者は、どこまで信じるか、測定値の扱いに戸惑っているところですよ。弥生時代の始まりについて B.C.500 年頃と考える人もいます。

土器型式の編年研究と CrossDating(比較年代決定法)などによつての寺沢薫氏の 240~260A.D.説と、歴博年代の 240~260A.D.が偶然?一致した事も注目すべきでしょう。正直なところ私には歴博の測定値について批評はできません。しか

し地球物理学などの発達と世界中の C¹⁴ の測定値の扱いを見れば、大方は信頼されているのでしょう。ですから私は参考資料とはしますが、C¹⁴ 年代だけをうのみにすることはしないようにしています。箸墓を 250 年頃とする人もおり、卑弥呼の 247、248 年が頭にあるからでしょう。箸墓を 260 年頃より新しいと考える人もいますし、私はあくまで C¹⁴ 年代を参考として扱っています。

【質問 5】弥生墳丘墓の形態や出土した特殊器台は、次の前方後円墳→連合国家形成に密接につながるとされていますが、「墳丘+庄内系土器+中国鏡の破鏡」の時代と「巨大前方後円墳+三角縁神獣鏡」の時代との間には大きな時代的な画期があるのでしょうか。

【回答】 墳丘墓社会と巨大前方後円墳の社会とは、時間的に大きなへだたりがあるとは思えません。もし纏向古墳群といわれるような庄内期の墳丘墓の直後に箸墓が登場するのであれば、一大画期があると考えざるをえません。纏向の石塚やホケノ山と墳丘長 280m の箸墓の土木量は問題にならぬほどの差があり、規模の大小だけでなく、投入された人的資源や建設上の組織や運営上のメカニズムは比較できないほどの差があったといわざるをえません。

また最近の考古学上の知見によれば弥生時代後期の鉄器が多く出土しており、とくに山陰地方で顕著であります。このような金属器の原料の入手に関しても、朝鮮半島との流通を考えればならず、古墳出現期の画期の問題は複雑な様相を示しています。

弥生後期後半の墳丘墓には、三角縁神獣鏡の副葬はみとめられず、大阪府高槻市宮山墳丘墓に後漢鏡 2 面とともに 3 面の三角縁神獣鏡が存在することが問題となるでしょう。時代的な画期を求めるとすれば、やはり箸墓のような巨大前方後円墳の登場が一番大きな意味をもつのではないのでしょうか。

【質問 6】弥生後期後半に墳丘墓が瀬戸内、四国、山陰北陸、近畿、東海、関東に同時多発的に出現している「原動力」は何ですか。中央からの伝播ですか、それとも在地の成長ととらえるべきでしょうか。

【回答】 近年になって漸く資料が揃い始めた感があり、弥生後期後半期の同時多発的な墳丘墓の出現は、1、2 世紀における列島内の経済的、政治的な激動状況の中で、社会的な発展の要国があったものと思われま。

墳丘墓の内容を見ると葬送の祭祀とも関連するのですが、中国鏡とくに斜縁系の半肉彫獣帯鏡、画文帯神獣鏡をはじめ、後漢鏡類の破鏡、破砕鏡が含まれており、これらが 2 世紀を中心に朝鮮半島からもたらされたとも考えられ、弥生後期時代の倭と半島との、かなり緊密な交流があったことを疑うわけにはいきません。

北部九州をはじめ山陰、北陸から西部・東部瀬戸内沿岸を含めて弥生時代後期には、かなり政治的な関係性をもった「首長制社会」が成立していたと思われま
す。広汎な列島内社会において墳丘墓を出現させる社会状況が 2 世紀には、出現
していたと思います。

最近の山陰、北陸地方から関東における弥生後期の考古学資料が示す社会の進
展度は、北九州と畿内という二極に限定されず、各地で同時多発的に首長墓であ
る墳丘墓が出現している状況がみとめられます。中央との関係も否定できません
が、私は各地の在地社会の成長が基本となっており、中国鏡の存在から政治的な
紐帯があったと考えています。それが邪馬台国とどのような関係を示すのかは、
不明確です。

第 2 講 ホモ・サピエンスの進化－世界拡散と日本列島－

海部 陽介先生（国立科学博物館人類研究部研究主幹）

**【質問 1】 何故人類は生息地を拡大させていったのでしょうか。大型動物の絶滅など食料資源の
問題と関わるものなのでしょうか。**

【回答】 科学的に確かなことはわかりませんが、理由は 1 つでなく、時と場合によって様々
な理由があったと考えるのが妥当と思われま
す。暮らしていた土地が住みづらくな
ってやむなく移住したこともあれば、新天地でのよりよい生活を期待して積極的に
出て行ったこともあったでしょう。その他にも様々な理由があったかもしれません。

**【質問 2】 ある本で、現生人類は「ホモ・サピエンス・サピエンス」という一種であると書いてありま
した。サピエンスと何故繰り返すのですか。**

【回答】 ホモ・サピエンスはいわゆる種名ですが、ホモ・サピエンス・サピエンスは亜種
名です。ホモ・サピエンス種の中のサピエンス亜種ということになります。ネア
ンデルタール人などの旧人をホモ・サピエンスに含める広義の考え方では、旧人
と現生人類を亜種レベルで区別します。この時、ネアンデルタール人の亜種名は、
ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスとなります。しかし最近では、どち
らかと言えば両者を種レベルで区別することが多くなってきているため、このよ
うな亜種名はあまり耳にしなくなっています。

【質問 3】現在の日本人はシベリヤ方面、朝鮮方面、中国方面、ミクロネシア方面、東南アジア方面など、どの方面から来たのでしょうか？各方面からだとするとの割合はどの程度でしょうか。

【回答】割合まで正確にわかりませんが、長い時代を通じて、多方面から日本列島へ人がやって来たというのが実態と思われまます。少なくとも弥生時代の開始期に、大陸からある程度の渡来民がやって来たことは確実で、彼らと在来の縄文人たちと混血を経て、現代の日本人が形成されてきました。そうした弥生渡来民の故郷は少なくとも東南アジアではなく、大陸の北部にあると考えられています。5～9世紀の北海道には、北方からオホーツク文化人が現れ、アイヌに遺伝的な影響を与えました。それ以前の縄文時代や旧石器時代にも、複数の集団の移入・移住があったかもしれません。それを明らかにしようという研究が、最近活発になってきています。

【質問 4】ヨーロッパ・アジアに出た旧人は何故ホモ・サピエンスとなれなかったのでしょうか。又旧人はホモ・サピエンスによって滅ぼされたのでしょうか。

【質問 5】ホモ・サピエンスが(ユーラシアでなく)アフリカの旧人から進化した理由は、アフリカの環境的な特性によるものなのでしょうか。そうだとすると、その環境の優位性とはどんなもので、それは、人類がアフリカで誕生した背景とも軌を一にするものなのでしょうか。

【回答】4・5とも興味深くかつ難しい質問です。歴史科学は、過去の事実を記述する学問体系ですが、どうしてそうなったかという問いにはなかなか答えられません。アフリカの多様で変動する自然環境が進化を促したという説がありますが、後付けの説明であり説得力があるように思えません。一方で、人類はアフリカ起源であるのでアフリカの人口が多く、そのため遺伝子の突然変異が生じる可能性も高かった、と考えることはできそうです。しかしそうであるにしても、理由が1つとも限らないので、今後もさらに検討を重ねていかなければなりません。

旧人がサピエンスに“滅ぼされ”たかどうかは、現時点ではわかりません。それを検討するための十分な遺跡証拠や他のデータが、まだないのです。他の生物でも種の交替は起こりますが、そこに暴力が伴うわけではないので、見えないかたちで進む食資源獲得競争の中で交替が起きた、あるいは人口が爆発的に増えていったサピエンスに吸収されたなど、多様な可能性を検討しなくてはならないでしょう。

【質問 6】 コーカソイドとかモンゴロイドという形質的特性が昔から知られています。この差はいつ頃生じたものなののでしょうか。またこれはミトコンドリアの遺伝的変化・区分と対応しているのでしょうか。ミトコンドリアの系統図の中の諸民族の配置が、この特性の差に余り対応していないように見えるのですが。

【回答】 人種概念には曖昧性が多く、両者が必ずしもきれいに分けられるわけではないという前提のもとで返答しますが、サピエンスのアフリカ起源説が確定的になった現在では、両者の違いはサピエンスの出アフリカ後に生じたということになります。つまり両者が分化していったのは比較的最近で、そのために考えや娯楽を共有できるなど共通点も多いと理解できます。

ミトコンドリアDNAの変異で両者をおある程度区別できますが、より情報量の多い核DNAで分析すれば、もっと明確に区別できます。一方で過去に混血が生じている場合には、それがDNAに反映されます。しかし所詮同じホモ・サピエンスの地域集団ですから、両者の間で異なるDNAは、DNA全体の中ではごくごくわずかな部分に過ぎません。

【質問 8】 港川人はどこから来て、どこへ行ったのですか。お話しのように琉球諸島が陸橋で大陸と陸続きでなかった時と、また港川人が縄文人の祖先でない場合は。

【回答】 まだ研究途上の課題で明確に答えられませんが、現時点での見通しを整理します。

港川人が東南アジア方面にいた旧石器時代集団に由来する可能性は、極めて高いと考えられますが、実際にどのようなルートを辿って沖縄島へやってきたのかは、これからの課題です。おそらく台湾経由だったのですが、これを確かめるにはさらなる証拠が必要です。

人類学では、これまで日本列島の縄文人の祖先は、旧石器時代に列島へやって来た人々で、それは港川人で代表できるという考えが強い影響力を持っていました。つまり旧石器時代に日本本土へ渡った人々も、おそらく港川人と同様の集団で、その彼らが本土の縄文人になったと予測されていたわけです。しかし最近の研究では、港川人骨の形態的独自性が注目されるようになり、この考え方に見直しが迫られています。日本本土へやってきた旧石器集団は、必ずしも港川人と同様の集団ではなかった可能性がある、というわけです。一方で、沖縄の縄文人の研究はまだ不十分で、港川人が沖縄でその後どうなったのかはよくわかっていません。

第3講 地域考古学のこれから－茨城県陸平貝塚の実例から－

中村 哲也先生（美浦村教育委員会主査）

【質問】 P.10 周辺地域との関係について。陸平貝塚、平木貝塚、大谷貝塚、興津貝塚、虚空蔵貝塚の貝層の時期について御教示ください

〔貝塚の時期〕早・前前・前中・前後・中前・中中・中後・後とあります。

【回答】資料で用いた時期区分の概要を土器型式で表現すると以下のとおりですが、前葉、中葉、後葉という表現は、陸平貝塚周辺遺跡の実態に則し、私独自の区分を用いた部分もあり、必ずしも一般共通区分ではないことをご承知おきください。

- ・ 早期：撚糸文系～条痕文系土器期
- ・ 前期前葉：花積下層式～関山式期
- ・ 前期中葉：黒浜式（含む植房式）期
- ・ 前期後葉：浮島式～興津式期
- ・ 中期前葉：五領ヶ台式～阿玉台Ⅱ式期
- ・ 中期中葉：阿玉台Ⅲ式～加曾利EⅠ式期
- ・ 中期後葉：加曾利EⅡ～Ⅳ式期
- ・ 後期：称名寺式～安行2式期

さらに、各遺跡において、現在までの調査で実際にその存在が明らかになっている貝層の詳細な時期は以下のとおりです。

○陸平貝塚

- 早期・条痕文系土器期
- 前期後葉・浮島Ⅲ式期
- 中期前葉・五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ⅱ式期
- 中期中葉・型式を特定できないが、当期の貝層は確認
- 中期後葉・加曾利EⅡ式期
- 後期・称名寺式～加曾利B式期

○虚空蔵貝塚

- 前期前葉・関山Ⅰ式期
- 中期前葉・五領ヶ台式～阿玉台Ⅰa式期
- 中期中葉・加曾利EⅠ式期

○大谷貝塚

- 前期中葉・植房式期

中期後葉・加曾利EⅡ式期

○興津貝塚

前期後葉・浮島Ⅲ～興津式期

○平木貝塚

後期・堀之内式期（発掘調査は行われておらず、表面観察の結果から）

第4講 デジタルと考古学－三角縁神獣鏡を読み解く－

水野 敏典先生（奈良県立橿原考古学研究所総括研究員）

【質問1】形状を比較して、作り方をはじめ工人組織などに分析が及んだのは、素晴らしい成果だと思いました。鏡の鑄型の作り方が良くわかりません。勉強するに当って、参考となる文献をご紹介ください。

【回答】ありがとうございます。古墳時代の銅鏡の土製鑄型（范）の研究は、実物の鑄型が出土していないため進んでおらず、よい文献はありません。単純に現代の鑄物と鑄型についてであれば、『日本人の生活と文化7暮らしの中の鉄と鑄物』（1982年ぎょうせい）、広く概観するならば『鑄物五千年の足跡』（1994年日本鑄物工業新聞社）などがありますが、銅鏡については、『古鏡総覧』学生社の中に、「三角縁神獣鏡の鑄造欠陥と『同范鏡』製作モデル」などの本講座の元資料となる一文があり、同范技法、同型技法、蠟原型を使った技法の整理をしていますので、図書館などで探してみてください。

【質問2】鑄型は石製なのでしょうか。土製なのでしょうか。（同様の質問多数あり）

【回答】講座中にもっと強調しておくべき点でした。繰り返しになりますが、古墳時代の銅鏡の鑄型は出土していません。しかし、古墳時代の銅鏡の表面には、刷毛で擦ったような痕跡や、真土による鑄型のヒビの補修痕跡が残っていますので、土製鑄型で造られたと考えています。特に、銅鏡の文様を写し取る踏み返し、つまり同型技法や、蠟を原型として鑄型を造る場合は、土製でしか鑄型を作ることができません。

【質問3】金属成分的な分析（金、銅、亜鉛等）との対応関係はどのようなのでしょうか。

【回答】銅鏡は、青銅でできており、成分は銅と錫と鉛が主成分です。中国製といわれる精良な物は白銅色で錫の含有量がやや多いですが、日本製の銅鏃（矢尻）でも白銅質のものがあり、輸入素材を用いたり、複数の産地のものを混ぜたりしていると、材料から製作地を特定することは簡単ではなさそうです。

現在、出土銅鏡は貴重な文化財であり、部分的でも破壊分析が行いにくく、錆びた銅鏡の表面をもちいて非破壊の蛍光 X 線分析で成分分析を行うことが多く、より詳しい製作時の成分を知ることが難しい状況です。

【質問 4】一次範というものは、挽型などを使って形状を作り他の部分は彫る？それとも押し型のようなもので形づくるのでしょうか。

【回答】これも、解明できていない部分です。複雑な外区の鋸歯文などは微妙に乱れがありますので手で彫っているとわかってきていますが、内区の一部の神像胴部などは形が似ているものもあり、押し型を使っておおまかな形を作り、細部を彫り込んでいく可能性はあります。

【質問 4】三角縁神獣鏡は精良なものではないということですが、仕上がった時点でも見る人が見れば違いを感じられるほど、他のものと比べて出来が粗製なののでしょうか。出土する鏡の出来のよさと、各地の古墳の被葬者の勢力などのレベルに何か相関はありますか？それとも出来のよさは全く関係ないのでしょうか。

【回答】実は、三角縁神獣鏡は出土数も多く、鏡背文様の精緻なものから非常に粗いものまでばらつきが非常に大きいのも特徴のひとつです。文様の精緻さを測る一つの目安として、銘文の文字の大きさが参考となると思います。同時期の良質の銅鏡の代表である画文帯神獣鏡は一文字が 4mm 以下で複雑な銘文が多いです。三角縁神獣鏡の多くは、単純化した「天王日月」など単純なものや、銘帯に 9mm 以上の大きい文字が使われており、違いは明らかです。

また、三角縁神獣鏡は「同範鏡」とよばれる同一文様鏡があります。これは、鑄造の度に鑄型の欠損が蓄積し、文様が崩れますが、補修はほとんど行われません。つまり、はじめから文様に傷ができることを前提とした造り方です。それに対して、後漢から三国時代の画文帯神獣鏡は、基本的に一つの鑄型で 1 面をつくとみられ、これを原鏡として同型技法で踏み返しても鑄型の崩れはほとんど目立ちません。造り方によりはじめから違いがあります。

古墳の被葬者の地位と文様については、必ずしも大きな古墳に良い鏡が副葬されているとは限りません。しかし、鏡径の大きな鏡が大型古墳に副葬されること

が多い傾向はありそうで、当時の価値観がうかがえます。

【質問 5】 短期間に大量生産と多種類生産が必要だった理由は何だったのでしょうか。分かる範囲でお答えください。

【回答】 これも解明できていない部分です。銅鏡は、古墳時代前期の、前方後円墳に象徴される祭祀に必要なもので、日本列島の各地の豪族に配るために一度に多くの銅鏡が必要であったとみられます。三角縁神獣鏡の出土は約 550 面といわれ、古墳時代前期にもっとも多く出土した鏡種であり、総生産数は 2000 枚以上になるのではないかと私は考えています。

しかし、三角縁神獣鏡を、どこで誰が造ったのかはまだ決着していません。なぜ、中国で出土例のない三角縁神獣鏡なのかも不明です。質問 4 の中で触れたように他の中国鏡と比べて大型であったことに意味がある可能性はあります。

【質問 5】 三角縁神獣鏡の「縁」の読みですが、「えん」と読まれる方と「ぶち」と読まれる方、書籍があります。どちらが正しいのでしょうか。

【回答】 三角縁神獣鏡の名は、考古学での呼び名であり、当時の人が呼んでいた名前ではありません。「さんかくぶちしんじゅうきょう」と読むことが多いようですが、ただ、音訓が混じった読み方となるため、「えん」という読み方も間違いとはいえないと思います。

【質問 6】 260 面の三次元計測の結果、従来から同範鏡と云われてきたもののうち、否定されるものがありましたか。また新たに同範鏡といえるものがありましたか

【回答】 「同範鏡」といわれていたもので結果が異なるものはいまのところみつかっていません。三角縁神獣鏡の破片で、「同範鏡」が不明であったものが、三次元計測により判明したものは桜井茶白山古墳の鏡片や、沖ノ島祭祀遺跡出土鏡など多数あります。

【質問 7】 鋳型から銅鏡を製作するものだと思いますが、日本でも中国からでも三角縁神獣鏡の鋳型らしきものは発見されていないのですか。そもそも鋳型は銅鏡を作成したら壊してしまう存在の物なのですか。また、挽型(三角縁神獣鏡用)も発見されていないのですか。

【回答】 三角縁神獣鏡だけでなく、古墳時代の銅鏡の鋳型は日本で 1 点も出土していません。

ん。もちろん挽型も出土していません。そのため、出土銅鏡の観察と計測から鑄型と製作技術の復元を試みています。ただし、弥生時代の銅鏡の石製鑄型は10点余り出土しています。

実験では土型鑄型の場合、銅鏡を取り出す際に一部壊れてしまうことが多いですが、鑄型から外すための離型剤を工夫するとあまり壊さずにはずすことができると近年言われています。製作後の鑄型は、再利用するために砕いてしまうこともあったと思いますが、銅鏡製作の場所が限られているため、なかなか出土しないのではと考えています。

【質問 8】三角縁神獣鏡が「すべて日本製か、すべて大陸での特注品のどちらである可能性が高い」とすれば、現在出土された約 550 面は、船載鏡と仿製鏡の 2 種類があるとされていることをどのように考えれば良いのでしょうか。

【回答】 船載鏡と仿製鏡の違いは、主に文様の違いと鑄上がりです。船載鏡は非常に種類が多く、一般的に文様が精緻であるのに対して、仿製鏡は基本的に三角縁神獣鏡の中でも三神三獣鏡ばかりで、文様は本来の神像や神獣の形と意味を失ったものが多いため、その名があります。しかし、鑄物としての製作技法には、両者はほとんど違いが見つかりません。また、同范技法を主力とする点で、踏み返して鑄型を複製する「同型鏡」を中心とする中国鏡とも、現在分析を進めている倭鏡（日本製）との間にも技術的な交流が確認できません。そのため、「すべて日本製か、すべて大陸での特注品のどちらである可能性が高い」ということになります。

【質問 9】現出土の三角縁神獣鏡が魏の皇帝からの下賜品でないとすれば現在中国、日本で出土している鏡の中で卑弥呼の鏡の候補となる鏡はあるのでしょうか。それともまだ両国で出土していないと考えるが妥当なのでしょうか。

【回答】 まず、『魏志』にある「邪馬台国」および「卑弥呼」が考古学的にどのように実在するかをじっくり考える必要があります。すくなくとも江戸時代から所在地論争が続いているのは、皆が思い描く「邪馬台国」の姿が大きく異なり、議論が噛み合わないことが最大の原因と考えます。

『魏志』の通りに銅鏡が下賜されていたとしても、鏡とあるだけで一種類と限定していませんので、古墳時代前期の後漢～三国時代の銅鏡全てが候補となりますが、方格規矩鏡や神獣鏡、画像鏡には官営工房である「尚方」の銘文を持つものがありますから可能性があると思います。

【質問 10】三角縁神獣鏡の最初の元型、鏡はまだ未出土ということでしょうか。また、倭人伝によ

ると卑弥呼への百枚の鏡は国人に示せとされていますが、この為下賜品の鏡を複製し、倭国(30ヶ国)全体に配布又は功労賞として国人に配布したとも考えられると思いますが、いかがでしょうか。

【回答】下賜品された鏡を複製するということは、同型技法（踏み返し）ができるということになります。しかし、三角縁神獸鏡に使用されているのは、同じ鑄型で繰り返し量産する同範技法が主力であることは分かっています。

はじめの1回目だけ同型技法で鑄型を造り、その鑄型を使って同範技法で量産するということになり、一応、説明はつきますが、原鏡が確認できない限り、証明は難しいと思われます。今回、鑄型の複製の可能性がある「同範鏡」を確認しましたが、初めの範傷のない原鏡に戻っての踏み返しはしていないようです。さらに、桜井茶臼山古墳など大王墓クラスの古墳は既に発掘されていますが、原鏡となる範キズのない特別な三角縁神獸鏡は確認できていませんので、現時点では、複製品をつくって配布している可能性は低いと考えております。

第5講 震災と考古学—阪神・淡路大震災の復興と発掘調査、そして東日本大震災—

禰宜田 佳男先生（文化庁記念物課主任文化財調査官）

【質問】東日本大震災にともなう遺跡調査に大学が協力する動きが広がらないのはなぜでしょうか。どんな問題が広がらない背景にあるのでしょうか

【回答】日本において、文化財は国民共有の財産となっています。したがって、文化財の保存そして活用は、地方公共団体にとって重要な責務の一つとなっています。

そうしたことを受けて、日本の遺跡保護（埋蔵文化財保護）は、昭和40年頃から、行政（地方公共団体）によって実施する体制を構築してきました。その結果、都道府県はもちろんのこと、全国の市町村の約3分の2に、埋蔵文化財の専門職員がおり、その数は全国で約6,000名弱に達します。今回の東日本大震災は、人命はもちろん、文化財にも甚大な被害を受け、復興に伴う遺跡調査の面積は膨大なものになることが予想されます。

さて、東日本大震災にともなう遺跡調査に大学が協力する動きが広がらないのはなぜでしょうか、というご質問です。

理由のひとつは、大学関係の方々も、日本の行政による遺跡保護の体制は世界

的にも充実したものとなっており、震災復興に関わる遺跡調査も行政の力で十分に実施できる、と考えておられるのではないかと思います。また、近年は、大学は大学でカリキュラムをこなしていくことが大変だときいていますので、大学の先生、あるいは学生が長期間にわたり遺跡調査に出ることができないということもあるのではないかと推測します。

震災の復興に伴う遺跡調査は、地方公共団体が主体となって実施していくことになるでしょう。ただし、行政だけ十分な調査ができるとは限りません。今後、大学等研究機関からの支援が必要な状態も出てくるでしょう。行政と大学とが必要に応じて、連携を図りつつ、復興調査を進めて行くことになるものと思います。

全国の埋蔵文化財に関わる、さまざまな立場の方々の支援・協力を受けて、今回の遺跡調査を終了させていきたいと考えています。

第 50 回明治大学博物館公開講座「考古学ゼミナール」

『日本考古学の未来』

質問回答集

2012 年 10 月 19 日 明治大学博物館

複製・転載はご遠慮ください